

# 2030年に向けた教育の在り方に関する 第1回日本・OECD政策対話(報告)

平成27年3月11日

文部科学大臣補佐官 鈴木 寛

## 政策対話の趣旨

2014年4月のグリアOECD事務総長・下村大臣間での合意に基づき、新しい時代にふさわしいカリキュラムや授業の在り方、アクティブ・ラーニングをはじめとした学習・指導方法、学習評価の在り方等に関する包括的な意見交換を実施(第1回:3月3日於パリ)。

### OECD側出席者

Stefan KAPFERER	事務次長
Andreas SCHLEICHER	教育・スキル局長
Yuri BELFALI	幼児教育・学校課長
David ISTANCE	シニアアナリスト
William THORN	同上
Stéphan VINCENT-LANCRIN	同上
Miho TAGUMA	同上
Tadakazu MIKI	アナリスト
Katja ANGER	コンサルタント
Masafumi ISHIKAWA	同上

### 日本側出席者

鈴木 寛	文部科学大臣補佐官
前川喜平	文部科学審議官
大杉住子	文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長
齊藤 真	文部科学大臣補佐官秘書官
小熊 浩	東京学芸大学総務部長
村尾 崇	OECD日本政府代表部一等書記官

## セッション1：2030年に向けた教育の展望

- ・ 2030年はどのような資質能力が必要とされる社会となっているのか
- ・ 必要な資質能力を育むには、どのような学習モデルが効果的か

## セッション2：能力の育成を保証するための学習評価の在り方

- ・ 育成された能力(認知的なものだけではなく、好奇心や耐久力、倫理観、リーダーシップなどの非認知的能力を含む)はどのように評価できるのか
- ・ 大学は、学生の能力を一貫して高めていく観点から、学生が高校教育を通じて獲得した能力をどのように評価すべきか

2

## 2030年はどのような資質能力が必要とされる社会となっているのか

- 協同問題解決能力 (PISA2015)
- 世界で生きるためのグローバル・コンピテンス (PISA2018)
  - ・ グローバルコミュニケーション力
  - ・ 文化横断的・相互的なものの考え方
  - ・ グローバルな思考
  - ・ 多様性の尊重
  - ・ シチズンシップ
  - ・ 地域的課題とグローバルな課題との相関
- 必要な能力を育むため、主体的に深く学ぶ「アクティブ・ラーニング」

3

# 必要な資質能力を育むには、どのような学習モデルが効果的か

- 「アクティブ・ラーニング」の要素
- 次世代対応型教育モデルの研究開発
- 資質能力を育成するための新たな教科構成
  - ◆シチズンシップの涵養
    - 学級・学校・地域・社会・国家・グローバル社会において協働して問題を解決する能力
    - 国家社会の形成者として、また自立して社会生活を営むために必要な制度的知識
    - 社会参画
  - ◆グローバル社会において求められる地理的・歴史的考え方の育成
    - 自国のこととグローバルな課題を相互に関連付けて学ぶ
  - ◆高度な問題解決能力を育成するため、教科横断的な探究活動を深める学習
- 教員の資質能力向上

4

## 第1回政策対話の成果①

- 教育課程企画特別部会における学習指導要領改訂に向けた議論や、高大接続改革の方向性を紹介。
- OECD側からは、PISAの好成績で満足してしまう国も多い中、日本が更に次のステップに進もうとしていることや、現在取り組んでいる学習指導要領改訂・高大接続改革の方向性について、国際的に見ても大きな改革であり素晴らしいことであると賛辞。
- また、OECD東北スクール事業の成果を通じて、2030年の教育の在り方への多くの示唆を得ているとの謝辞。

5

- OECDとしては、政策対話をはじめとする日本との共同プロジェクトの成果を核としながら、より多くの国を巻き込み、2030年に向けた教育の在り方を議論する枠組みとして”Education 2030”事業の立ち上げを加盟国に提案予定。
- PISA2018で調査対象となる「グローバル・コンピテンス」など、これからの時代に求められる能力や、カリキュラムデザインの在り方については、日本の知見も生かし共に検討していきたいこと、新たな評価手法等についてはOECD側の技術や知見に基づく協力を惜しまないことなどのコメントがあった。
- 次回政策対話は、6月下旬から7月上旬の間に東京で実施予定。

6

### 政策対話において出された主な意見 — 資質・能力等 —

- 世界の雇用のニーズをみても、高い問題解決能力を要する仕事のニーズは高まり、低いものはニーズが低下している。
- テクノロジーの変革と教育の変革のタイムラグは、社会的な痛みを引き起こす。コンピュータやロボット、AIが人間の知力を凌駕していくような社会に人間がいかに幸せに生きていくか、教育の改革が求められる。
- 求められるスキルは変化している。他者と協働しチームを編成できる人、異なる価値を統合できる人、根拠等を明確に説明できる人、深い知識と広い視野を持つ人、人間同士の関係を重視する人、グローバルな課題を地域の課題と関連付けられる人が求められる。
- シチズンシップについては、一つの固有の組織においてどのように生きるかということではなく、複雑で変化の激しい社会の中で自分をどのように位置付け、他者と一緒に生き課題を解決していく力として捉えることが重要。
- グローバル化は同時に地域に帰着するものでもあり、自国とグローバル双方の観点から地理的・歴史的に考える力を高めることも重要。また、異なる歴史を学ぶことは、異文化の中で生きていくことへの不安を減らし、豊かさをもたらす。
- 学習意欲は、起業精神、イノベーション、独創性においても重要な資質の一つであるが、とりわけ日本は、子供の年齢が上がっていくにつれて下がっていることをPISAデータが示しており、懸念される。

7

- カリキュラム・デザイン・センターの作成した図にある3つの概念（①何を知っているかという「知識」、②知っていることをどう使うかという「スキル」、③社会の中でどのように関わっていくかという「人格・性格」）及びそれを包含するメタ認知は、日本の学習指導要領改訂が目指しているアプローチと近いと思う。一つの面だけではなく、3つの面を立体的に捉えどう統合していくかが、まさにカリキュラムデザインである。
- O E C DのEducation 2030のプロジェクトでも、上記③のような、気遣い、関心、勇気、逆境を跳ね返す力、倫理観、リーダーシップなど、人生を自分で切り開いていくための方向付けを行う資質も扱っていきたいと考えている。
- 批判的思考などの現代的な学びは全てアクティブ・ラーニングから育成されるのではないか。P I S A 2 0 0 9では、とりわけ日本は、読んで理解はできても考えを構造化して表現することが得意ではないとのデータが出ており、現在の教育が十分ではないことが表れている。
- 現代的な学びの評価の難しさなどはあるが、新たな評価なしに新たなカリキュラムはあり得ない。世界の専門家も交え、P I S Aの構築ノウハウなども参考にしながら、教員が活用できる手段や道具を開発していく必要がある。

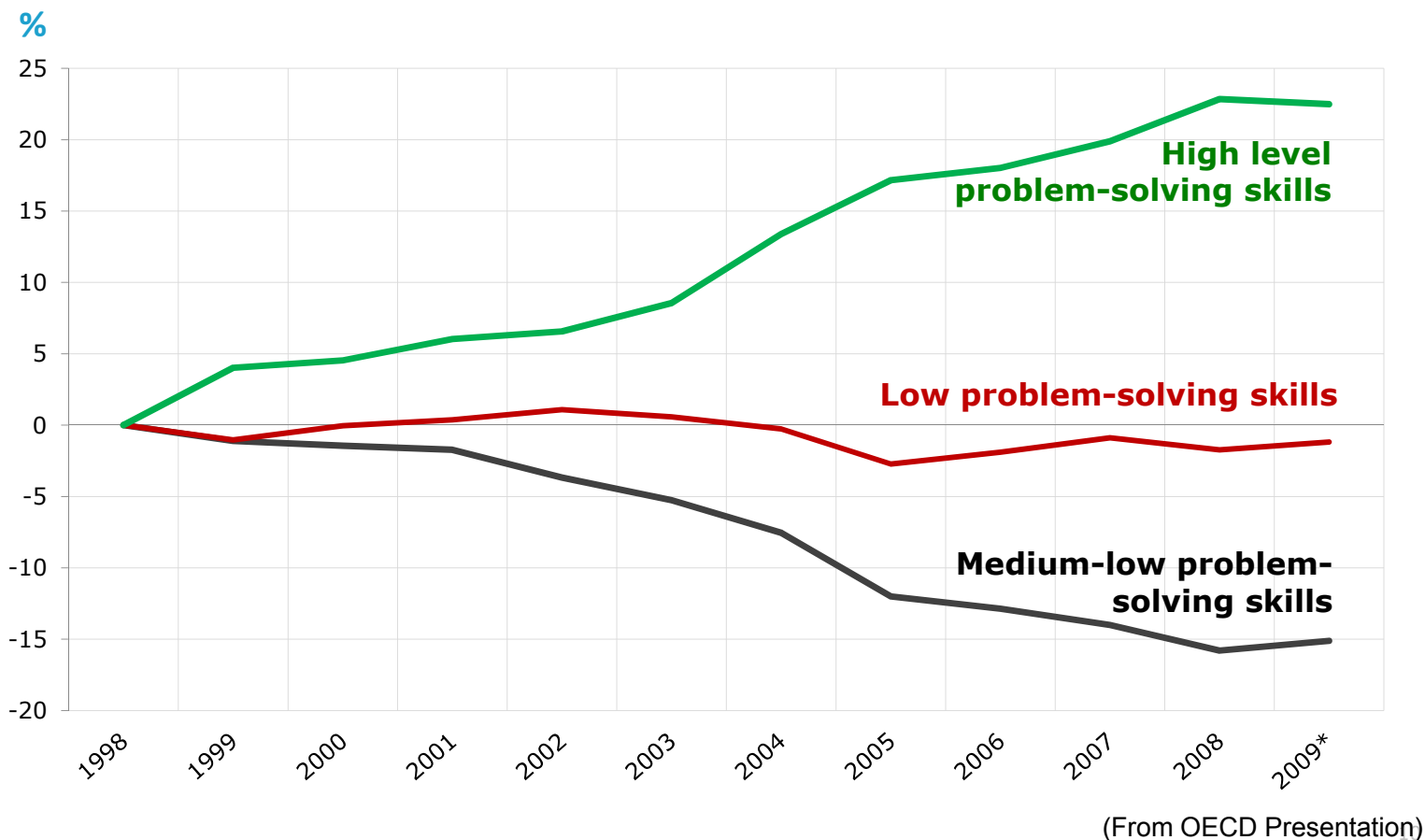
8

## 政策対話において出された主な意見 —その他—

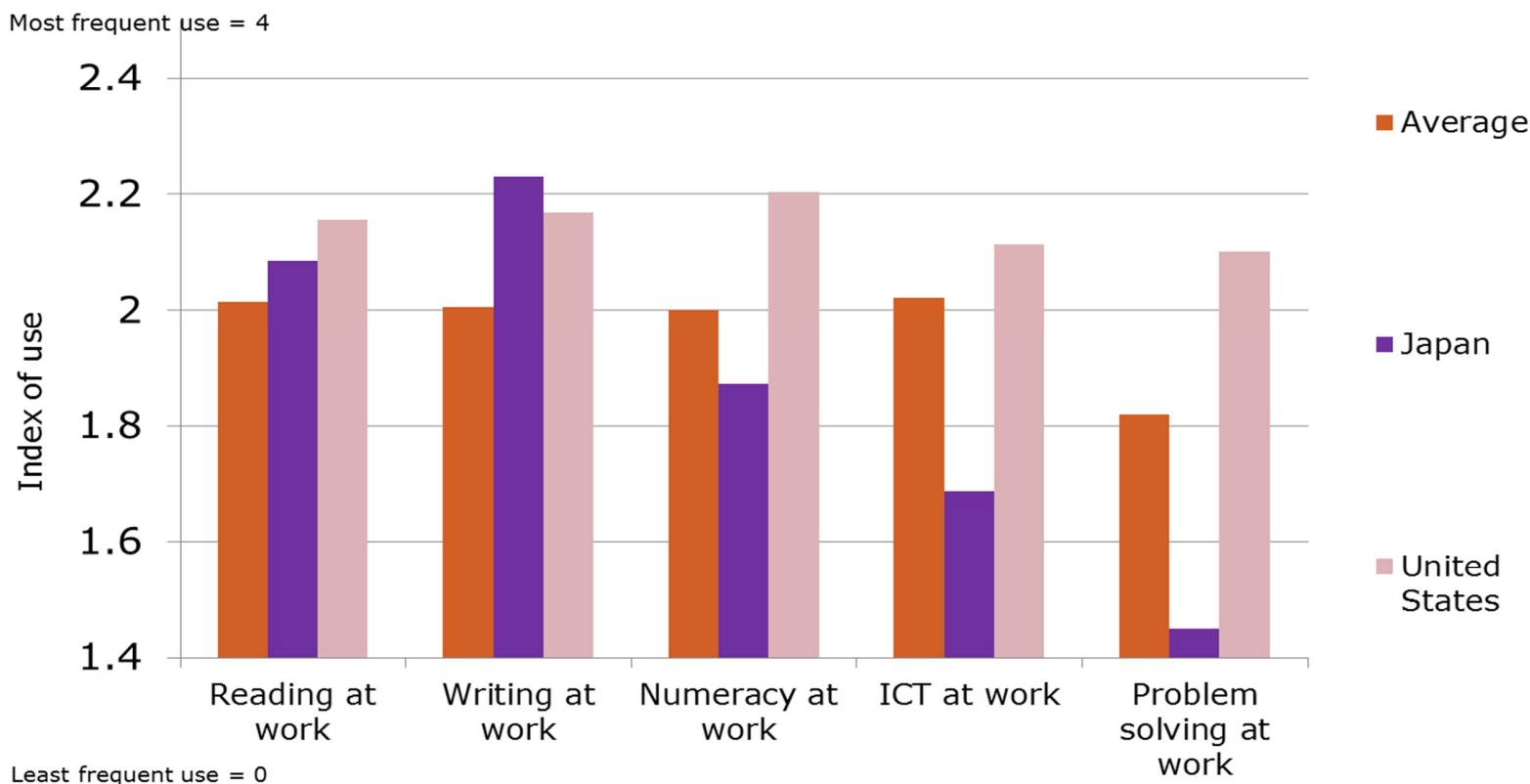
- 教員養成については、今後は、教科の専門性と教科横断的な能力を育成する力のバランスのとれた養成の必要性が高まるのではないか。新しい評価方法に対応した教員教育も求められる。
- 大学入学者選抜では、短い時間のテストで能力を評価するよりも、高校での学校評価に重点を置くやり方の方が、より広い知識や能力を評価でき、健全ではないか。また、エッセイは書くことで自分の考え、議論を構築する活動であり、まさに21世紀スキルの重要な一部であると言える。また、インタビューは非常に強力な評価手法である。
- P I S A 2 0 1 8で調査対象となる「グローバル・コンピテンス」の定義については、Employabilityにのみ偏った議論ではなく、世界に対して深い視野を持ち未来を開くための幅広い力として、P I S A 2 0 1 5の「協同問題解決能力」とも関連付けつつ議論されることを期待。

9

# Evolution of employment in occupational groups defined by problem-solving skills

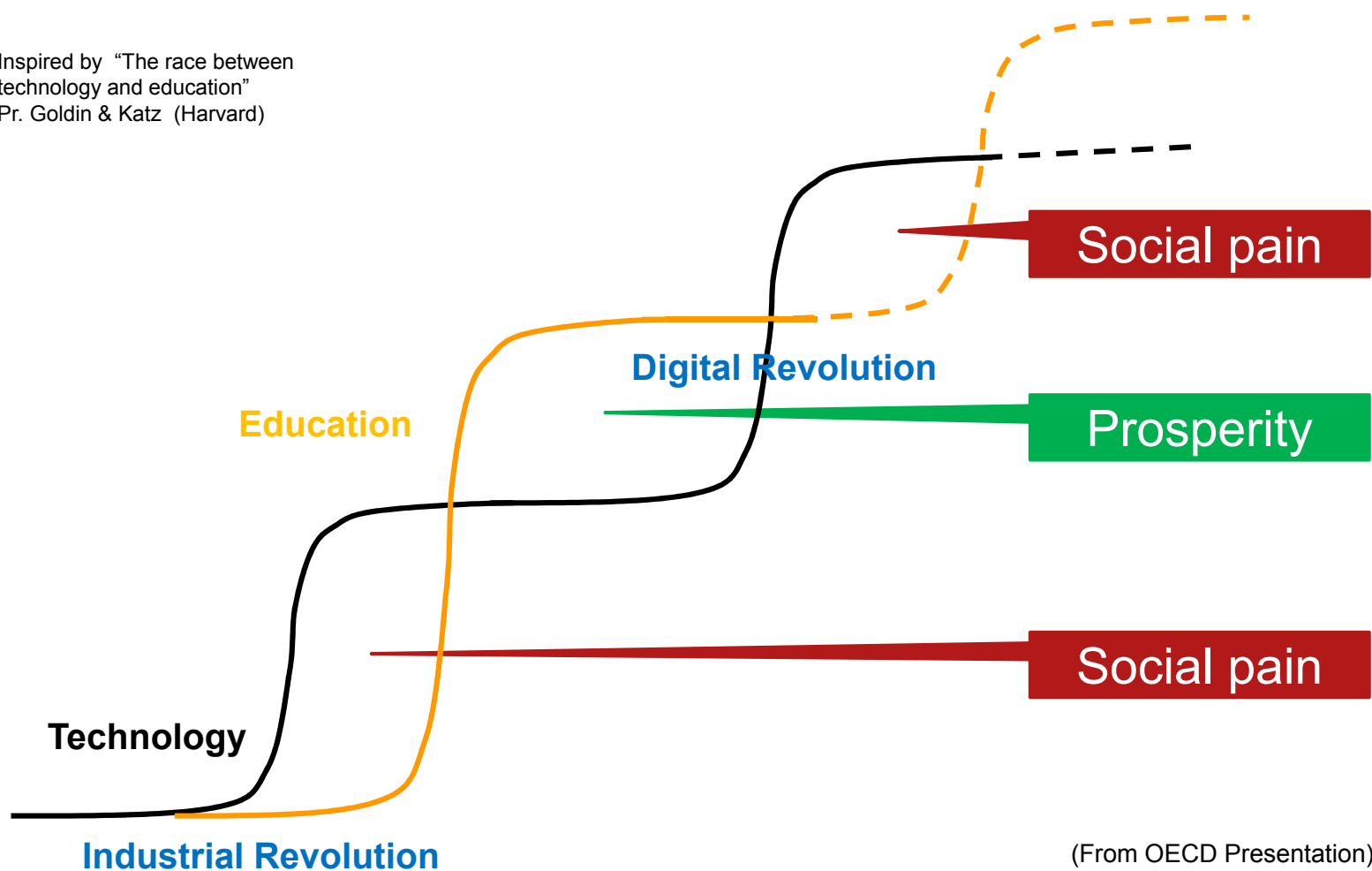


## Use of skills at work



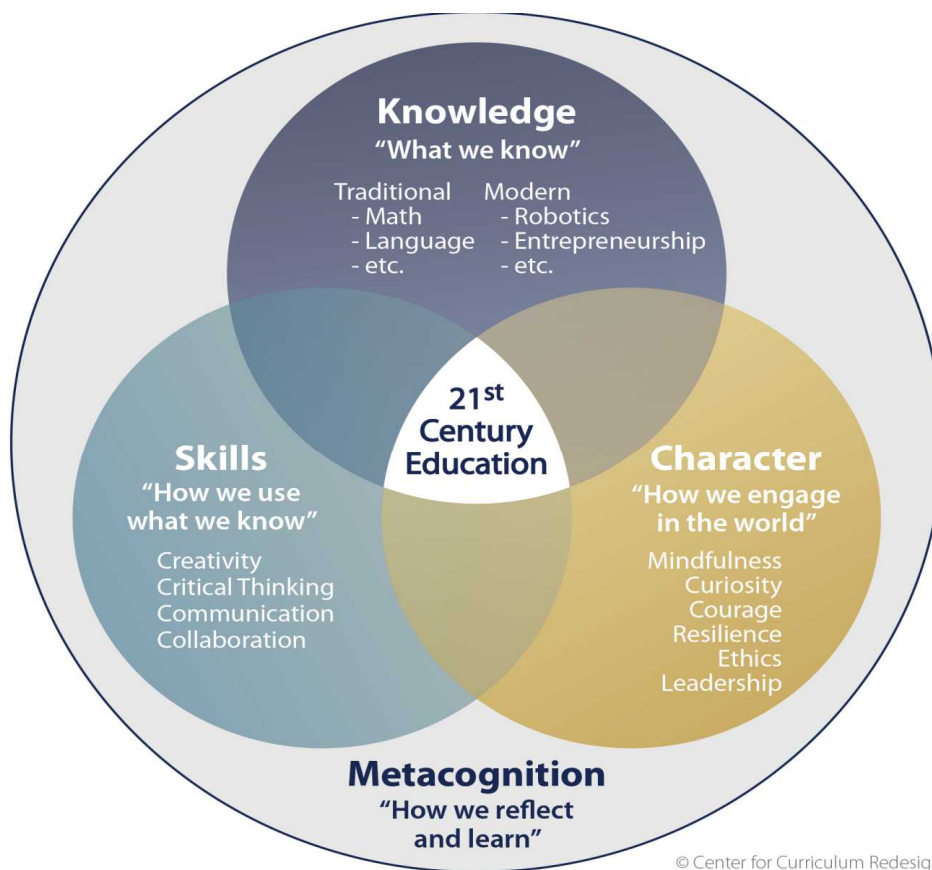
# The Race between Technology and Education

Inspired by "The race between technology and education"  
Pr. Goldin & Katz (Harvard)



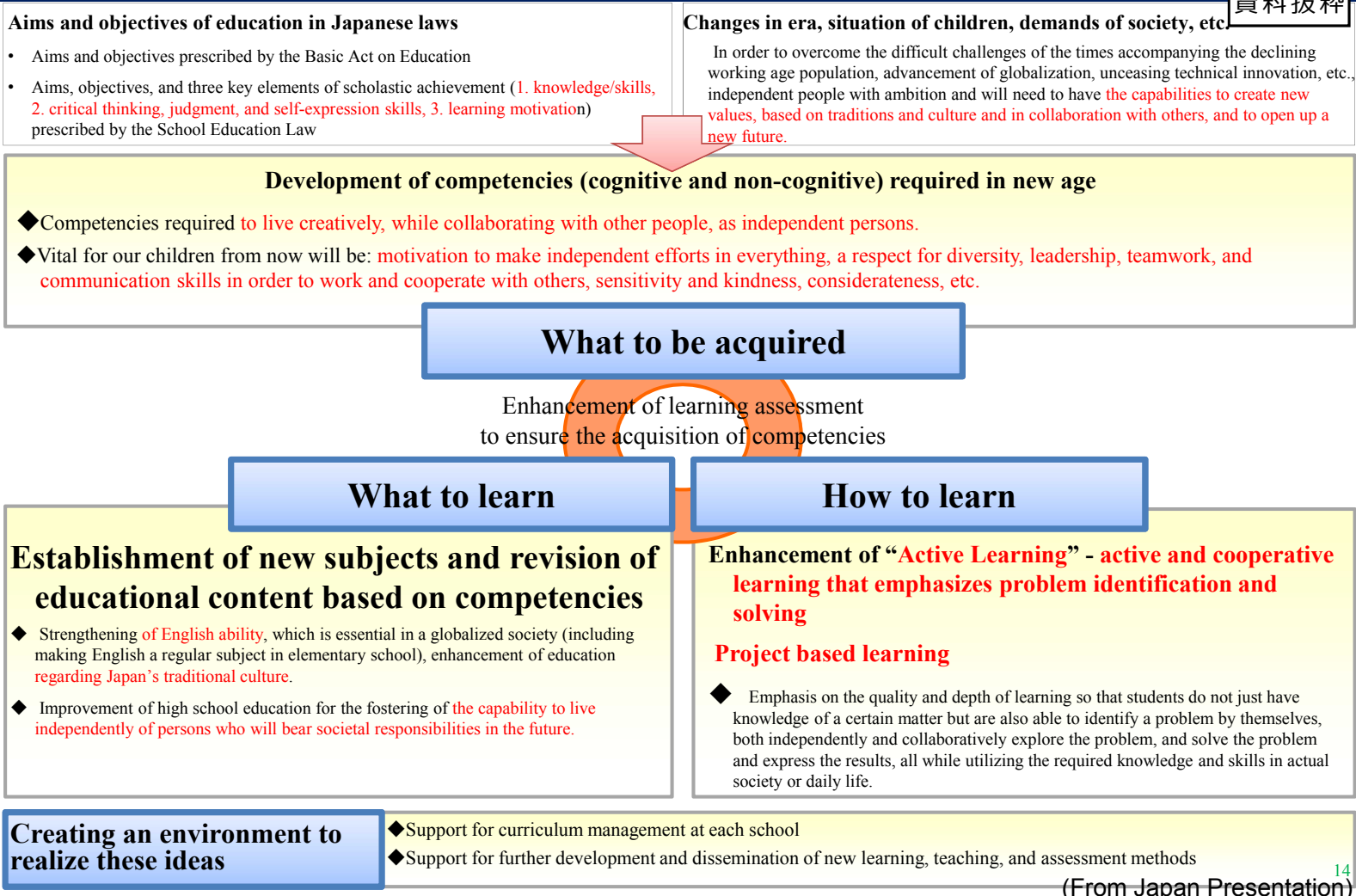
(From OECD Presentation)

## What this means for curriculum design

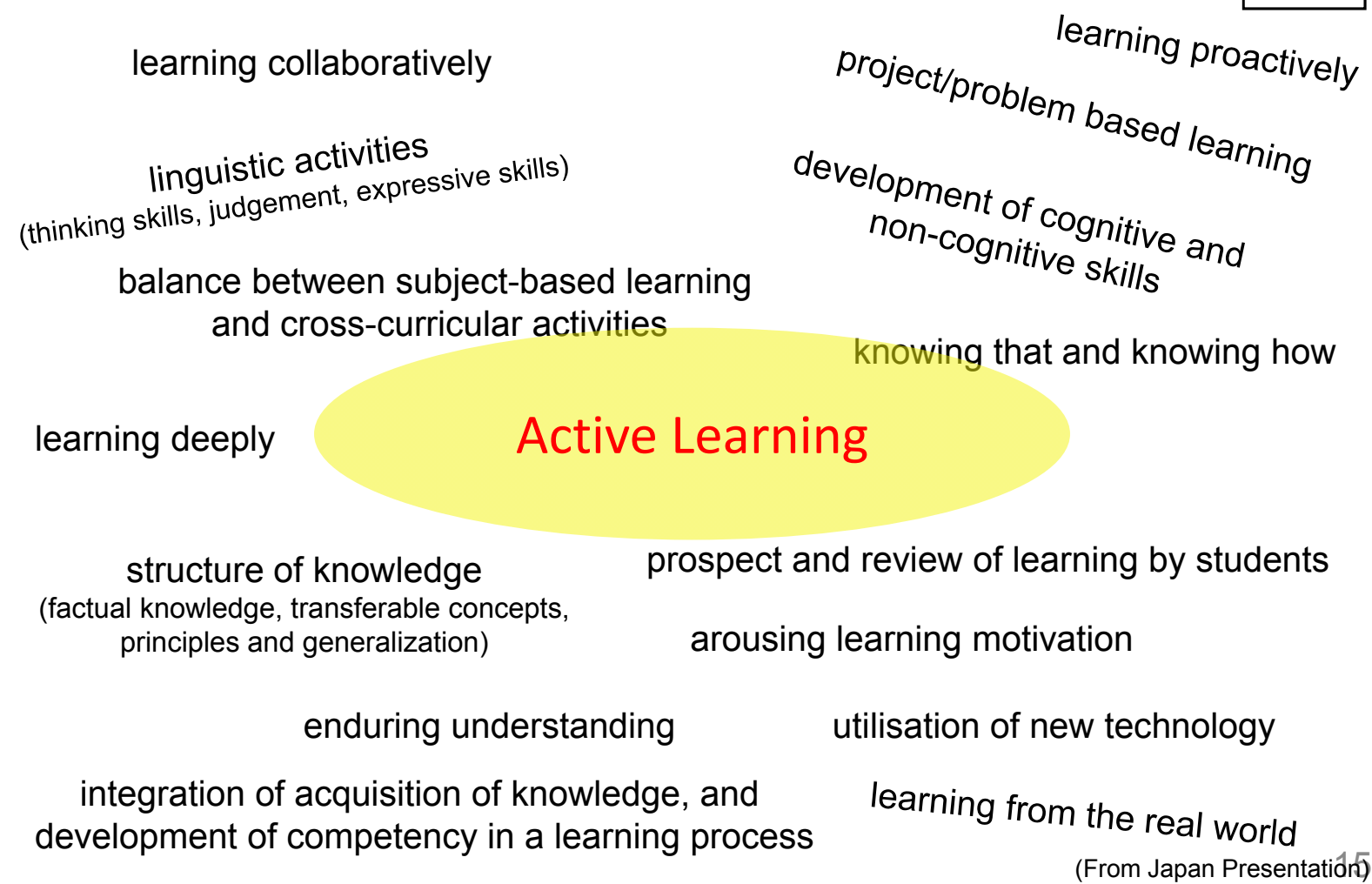


© Center for Curriculum Redesign

(From OECD Presentation)



## The Components of “Active Learning”





Motivation ⇒ Orientation ⇒ Acquisition ⇒ Application ⇒ Criticism ⇒ Control

Motivation  
To stimulate cognitive/essential interest on the subject.  
A learner faces a situation where he/she cannot deal with the current problem with the knowledge or experience he/she has.

Orientation  
To begin learning activities for the solution of the problem.  
To form an exploratory hypothesis (model) which explains principles and structures of the knowledge necessary for the solution of the problem.

Acquisition  
To obtain the knowledge necessary to solve the problem.  
To enrich the exploratory model with help from the new knowledge.

Application  
To try to solve the problem by actually applying the learned knowledge.  
To apply the model as a tool when solving the problem, influence changes in real life, and generating innovation.

Criticism  
To realize the limit of knowledge through the application of knowledge for a solution to the problem and to re-construct the model. To critically evaluate adequacy and effectiveness of the explanation model that he/she has acquired.

Control  
To review the process and to try the next learning process while carrying out revisions to the process depending on the necessity.

It would be important to set learning through such processes as fundamentals of lessons so that children can learn "how to learn"